

登園許可証が必要な感染症

病名	症状の特徴及び経過	潜伏期間	登園停止期間
インフルエンザ	突然38～39℃の発熱、頭痛、関節痛、全身のだるさ、風邪症状（のどの痛み・鼻汁など）が強い。嘔吐や下痢を伴うことがある。肺炎・脳炎などの合併症に注意が必要。	1～2日	解熱して2日を経過するまで
百日咳	普通の風邪症状から始まり、やがて特有の咳（激しく咳き込んだ後ヒューッと笛を吹くような音をたてて息を吸う）が発作的に現れるようになる。特に夜間の咳がひどい。約1ヶ月で咳の回数は減るが、回復には3ヶ月近くかかる	1～3週間	特有の咳が消失するまで
麻疹（はしか）	最初に発熱・咳・鼻水・目やになどの風邪症状が出る。3～4日で一時熱が下がったように見えるが、再び熱が高くなり頬の内側の粘膜に白い斑点（コプリック斑）ができる。その後全身に発疹が出て、咳・目やにがひどくなり、高熱もさらに数日間続く。この時期に肺炎・脳炎などの合併症が多く見られる。合併症がなければやがて解熱し、10日～2週間程度で一般症状が改善する。	9～14日	解熱した後3日を経過するまで
流行性耳下腺炎（おたふく）	両側または片側の耳下腺が腫れ、微熱が出る。痛みを伴う。通常10日ほどで腫れがひく。	18～21日	耳下腺の腫脹（はれ）が消失するまで
風疹（三日ばしか）	発熱と紅く細かい発疹がほぼ同時に出現し、首や耳の後ろのリンパ節が腫れる。3日程度で解熱し発疹も3～4日で消える。	2～3週間	発疹（ぶつぶつ）が消失するまで
水痘（みずぼうそう）	紅い小さな発疹が現れ、その発疹の中心が半日～1日で水泡となる。水泡は2～3日で黒いかさぶた（痂皮）になるが、新しい発疹が次々と全身に出現し、全てが痂皮になるまでには1週間ほどかかる。感染力が強い。	2～3週間	すべての発疹が痂化（かさぶた）するまで
咽頭結膜炎（プール熱）	38～39℃の発熱が3～4日続き、咽頭炎と結膜炎をおこす。プールを介して流行することがある。	5～6日	主要症状が消失した後2日を経過するまで
流行性角結膜炎（はやり目）	目やに、涙目、結膜の充血とむくみ、眼瞼（まぶた）の発赤と腫張。発熱を伴うこともある。細菌感染を合併すると角膜潰瘍などをおこして視力障害を残すこともあるので注意が必要。	5～12日	完全によくなるまで
腸管出血性大腸菌感染症（O-157など）	水様性の下痢、強い腹痛と血便。症状が強いほど要注意。感染しても半数以上が無症状あるいは軽度の下痢が現れるのみ。	4～8日	伝染の恐れがなくなるまで
急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎の症状と同様。眼の強い違和感と痛み、結膜下の出血などが見られるが、視力障害を残すことはない。	1～2日	医師の判断による

以下の病気については登園許可証の必要はなく、口頭にて診察した医師の許可を得てください。

病名	症状の特徴及び経過	潜伏期間	登園停止期間
溶連菌感染症	発熱、咽頭の発赤、リンパ節の腫れ、舌が苺のように赤くざらざらした状態になる（苺舌）。発熱に続き、発疹がすぐに出現することもある。発熱を伴って真っ赤でざらざらしたような発疹が全身に現れるものを猩紅熱という。	1～7日	医師の判断による
手足口病	手のひら、足の裏や甲、指と指の間、唇や口の中に小さい水泡性の発疹ができる。発疹は手足全体、肘や膝、おしり周辺に多数見られることもある。腹・胸・背中にはできない。38℃くらいの発熱が見られることがある。	2～7日	医師の判断による
伝染性紅斑（りんご病）	ほほに境界のはっきりした紅い発疹が現れ、続いて手足に網目状の発疹が広がる。胸腹部背中にも現れることがある。この発疹は1週間前後で消える。	17～18日	医師の判断による
ヘルパンギーナ	発熱、咽喉の痛み、紅い小さな発疹が口の粘膜に現れ、やがて水泡になる。咽喉の痛みのため食欲低下があり、水分も摂れなくなると脱水症状に注意が必要となる。	2～7日	医師の判断による
マイコプラズマ感染症	咳を主症状とした呼吸器感染症。気管支炎・肺炎などをおこす。発熱や咳などの風邪症状から始まる。咳が頑固で続くような場合は肺炎に進展している可能性が疑われる。	2～3週間	医師の判断による
流行性嘔吐下痢症	秋から冬にかけて多い。嘔吐と下痢が突然現れる。	1～3日	医師の判断による
ウィルス性肝炎	A、B、C、D、Eの5型が明らかになっている。これらの他にアデノウイルス・サイトメガロウイルス・EBウイルスなども肝炎の原因になる。		医師の判断による
伝染性膿痂疹（とびひ）	虫刺されや湿疹などを掻き壊した皮膚に菌が付き化膿する。掻き壊した手で他のところを掻くと次々に化膿する。感染力が強い。		医師の判断による